

17	刈谷	刈谷市立富士松中学校	タチ ユキ 名前 田口 雄希
分科会番号	03b	分科会名	社会科教育 (中学校)

研究題目 社会的事象に問題意識をもち、より良い社会への参画を目指す生徒の育成
～「情報技術の発展した社会について考えよう」の実践を通して～

研究要項

1 主題設定の理由

現代社会ではA IやI C Tを中心とする情報技術が急速に発展しており、私たちの生活に深く浸透してきている。タブレット注文やセルフレジ、遠隔医療、生成A Iを用いた文章作成など、生徒にとっても身近な技術となっている。一方で、誤情報の拡散、詐欺の巧妙化、技術を使いこなせない人との格差、さらには戦争や犯罪への悪用といった新たな課題も顕在化している。情報技術の利便性と危険性が併存する現代において、社会的事象を自分事として捉え、よりよい社会の実現に向けて判断・行動できる生徒の育成が社会科に求められていると考える。

本学級の生徒は、学習意欲が高く、新しいことを学びたいという気持ちであふれている生徒が多い。また、調べたことや自分の知っていることを積極的に話す様子もある。しかし、獲得した知識を基に思考する活動はあまり活発にできず、苦手としている。また、社会的事象に関して、教科書の中の出来事と考える生徒も多く、自分事と捉えて考える生徒は少ない。学習した歴史的な出来事を現代や未来の社会とつなげて考える生徒も少ない現状がある。これは歴史的な分野を学習するうえで、社会的事象を身近に感じることができていないからだと考える。

以上より、本研究の主題「社会的事象に問題意識をもち、よりよい社会への参画を目指す生徒の育成」を設定した。

2 目指す生徒の姿

本研究では「社会的事象に問題意識をもって学習する姿」と「よりよい社会への参画を目指して動き出す姿」の2つの姿を目指す。

○社会的事象に問題意識をもって学習を進める生徒

「社会的事象に問題意識をもって学習を進める」とは、社会的事象について興味関心もち、疑問に思ったことや社会が抱える問題点について必要なことを調べたり、話し合いをしたりしながら自分の考えを構築し、具体的な解決策を考える姿とする。

○よりよい社会への参画を目指して動き出す生徒

「よりよい社会への参画を目指す」とは、単元の中で扱う社会的事象について自分はどのような関わり方ができるのか、これからの社会で生活していく中でどのように生きていきたいか考えている姿とする。

3 研究の仮説

仮説1

取り扱う社会的事象との出会わせ方を工夫したり、実際に情報技術を使う場面を設定したり、教師自作の資料を活用したりすることで、社会的事象に問題意識をもって学習を進めることができるだろう。

仮説2

生徒の思考を整理したり、考えを深めたりする場面で仲間と関わる場面を設定したり、考えたことを広げる場面を設定したりすることで、より良い社会への参画を目指して動き出すことができるだろう。

4 研究の手だて

(1) 仮説1に対する具体的な手だて

①教材との出会わせ方の工夫

出会う場面で社会的事象と魅力的な出会いをすることができれば、生徒は扱う社会的事象を身近に感じることができ、問題意識をもって学習を進めることができると考える。本研究では、人工知能（AI）との出会い方を工夫することによって、生徒が情報技術に興味関心が高まり、自ら問題意識をもって学習を進めることができるだろう。

②生徒の関心に合わせて作成した資料を提示、考えを整理する場の設定

問題意識をもって学習を進めるためには、疑問に思ったことや問題点について解決できるように適切な資料や疑問に対して考えを整理する場が必要だと考える。教師が自作した資料を生徒に合わせて配付することで、疑問に思ったことに対する解決方法を考えたり、さらに問題意識をもって学習に取り組んだりすることができるだろう。

(2) 仮説2に対する具体的な手だて

①話し合いや情報共有の場など生徒同士が関わり合う場の設定

より良い社会への参画へ動き出すためには、生徒一人一人の考えのみではなく、多くの意見を聞き、生徒自身の考えを深めることが重要である。また、教師が効果的に発問をしたり、問い返したりすることで、生徒の考えがさらに深まると考える。生徒自身の考えを話したり、仲間の考えを聞いたりして関わり合う場を設定することで、自分の考えと仲間の考えを比較しながら、問題の解決策を考え、解決へ、動き出すことができるだろう。

②単元の最後にまとめの時間や社会にはたらきかける場の設定

よりよい社会への参画を目指して動き出すためには学習したことをまとめたり、社会へはたらきかける場を設けたりすることが必要だと考える。本研究では、まとめる場面で、地域の方々に向けて回覧板を作る時間を設定し、学習したことを基に社会へはたらきかける場を設定することで、生徒が積極的に社会へはたらきかけることができるだろう。

5 生徒Aの実態と期待する姿

生徒Aは学習意欲が高く、新しいことをたくさん知りたいという思いをもっている。社会科の授業でも、積極的に発言をする姿がある。しかし、社会科に関するアンケートでは、「社会で学んだことが役に立っている」「問題意識をもって社会の授業に臨んでいる」の項目でどちらも「どちらかというといいえ」と回答している（資料1）。歴史学習の最後に行った振り返りでは、「これまでの歴史が大事だということはよく分かったが、今、自分たちの現状と違いすぎるので、現実味を感じられないことが多かった」（資料2）と記述しており、学習する社会的事象が自分事になっていないことがうかがえる。

生徒Aには、情報技術の発展という社会的事象との出会いや、教師自作の資料の提示によって、情報化が進む社会について良い面だけでなく、課題について考え、その解決策について考え、単元のまとめの時間や社会にはたらきかける場を設定したことを受けて、学習したことを自分たちだけでなく、他学年や地域に広めようとする姿に期待したい。

社会科は好きか	はい
社会科で学んだことが役に立つときがある	どちらかというといいえ
問題意識をもって社会科の授業に臨んでいる	どちらかというといいえ
資料1 生徒Aの社会科アンケート（単元前）	

これまでの歴史が大事だということはよく分かったが、今、自分たちの現状を違いすぎるので、現実味を感じられないことが多かったです。

資料2 生徒Aの歴史学習の振り返り

6 実践と考察

(1) 問題意識をもって学習に取り組もうとする生徒A（手だて（1）—①）

第1時では、現時点で情報技術がどれほど、社会に入り込んでいるか話し合いの場を設定した。C5の「文章をいい感じで作ってくれる」という発言に対し生徒Aは「宿題が楽じゃん」と反応した。このことから生徒AはAIを使うことで、楽になることがあると認識し、AIに対して興味を示し始めた。単元の導入で日常に入り込んでいる情報技術について考えさせたことで、生徒Aが情報技術の発展の成果について考えていることが分かる。生成AIを使う時間を設定した後、令和7年4月30日に中日新聞「採用×AI」の記事（資料4）を提示し、感想を交流する時間を設けた。生徒Aは「文章を自分たちはAIで作れるけど、面接の相手が人間じゃないのはなあ」と発言しており、AIが社会にもたらすよい面だけでなく、情報技術の進化が進んでいくことへの不安を感じていることが分かる（資料3）。

生徒Aは「自分がどうするか、どうやって情報技術を使うのか」と振り返った。「新聞記事から（中略）広がり過ぎると人間が決めることがないんじゃないかと思う」とあることから、新聞記事を提示したことで、AIが広がり過ぎていくことへの問題意識が芽生え始め、次の学習に向かっていこうとしていることが分かる（資料5）。

単元の導入時にAIの良い面だけでなく、課題に目が向くように日常生活の中でのAIのことや新聞記事を元にAIについて考える時間を設けた結果、生徒Aは情報技術が発展する社会について自分事として捉え、自ら問題意識をもって学習を進めようとすることができた。

T : どんなどきに情報技術が使われているのかな？
C2 : アメリカではドローンで配達することまで考えられている。
A : ロボットでいくと、料理をロボットが運んでいた。
C3 : AIも進化してきているって聞いたことがある。
T : AIって知っている人いますか？⇒13名挙手
知っていることを教えてくれるかな？
C5 : 文章をいい感じで作ってくれる。
A : (C5に反応して) 宿題が楽じゃん。
全員でAIを使って文章作成をする場を設定（資料4）
A : 自己紹介が一瞬でできた。面倒くさいことが一瞬でできる。
T : AIがこれから発展していくことに賛成ですか？
C6 : いろんなことが簡単になるのであれば、賛成。
T : ではここで見てほしい新聞記事があります。
新聞記事を提示する（資料5）。
T : この記事を見て考えたことを共有しましょう。
以下周りのグループで話をする内容
A : 文章を自分たちはAIで作れるけれど、面接の相手が人間じゃないのはなあ…。
C8 : でも、平等ではある。人の好みで決められる訳ではない。
資料3 第1時授業記録の一部



資料4 生徒に提示した新聞記事

今日の授業を受けてAIの発達はすごいと思いました。でも、すべてを機械に任せてしまうのは良くないと考えました。自分がどうするか、どうやって情報技術を使うのかが大切じゃないかなと考えました。また、新聞記事からAIが面接をするのは、平等だと思ったけど、広がり過ぎると人間が決めることがないんじゃないかと思うので、気を付ける必要があると思いました。パッと考えただけでも、情報技術は社会に入り込んでいるので、他にどんどころに情報技術が使われているのか考えてみたい。

資料5 生徒Aの第1時の振り返り

以上より、手だて（1）—①は生徒が社会的事象に問題意識をもって学習を進めるための手だてとして有効であったことが分かる。

(2) 資料から良い点と良くない点について考え、整理する生徒A（手だて（1）—②）

第2時では、教師自作の資料を用いながら、情報技術の発展による社会の変化について考えさせた。教師からはAI、ドローン、スマートフォンに関する進化と社会へ与える影響に関する資料を提示した。生徒AはAIに関する資料に注目し、どのような社会の変化があるのか考えた。生徒Aは「災害予測やリスク管理」に特に注目し、「緊急地震速報や避難指示をより速く伝えることができるので、AIの発展は社会に対していい変化

をもたらすと思う」と発言した。前時の振り返りで「他にどんなところに情報技術が使われているのか考えてみたい」と情報技術と社会の変化について知らなかった生徒Aがさまざまな社会の変化に関する資料と出会ったことで、情報技術の発展による社会の良い変化について考えることができた。教師から意図的に資料を提示したことで、生徒が問題を解決しようとしていることが分かる。

生徒Aは第2時の振り返りで「もっと楽な世の中になっていくと思いました」と振り返るだけでなく、「体が不自由な人や高齢者の方」「緊急地震速報や避難指示」と具体的な事象を挙げて記述していた。このことから、教師が自作でまとめた資料を提示したことで、生徒が社会的事象に対して具体的なことをイメージできるようになったことが分かる。また、「ただ、人間がやるべきことと、AIがやるべきことがごちゃごちゃになってしまうと人間にとって良くない世の中になると思うので、何が発展すべきで何を人間がやるべきなのか考える必要がある」と振り返り、情報技術の発展による社会の変化に対してよい点だけでなく、課題について目が向いていることが分かる。教師が意図的に情報技術の発展に関する良い点をまとめた資料を提示したことで、生徒Aが情報技術の発展に関して「人間にとって良くない世の中になると思う」と新たに疑問をもつことができた

これからの情報技術が発展していくと、ほとんどの分野がもっと楽な世の中になっていくと思いました。また、特に体が不自由な人や高齢者の方は情報技術が発展することによって暮らしやすくなるのではないかと思います。授業の中でも言っていたが、緊急地震速報や避難指示が速く出されると、助かる命が多くあるので、もっと発展してほしいと思いました。ただ、人間がやるべきことと、AIがやるべきことがごちゃごちゃになってしまうと人間にとって良くない世の中になると思うので、何が発展すべきで何を人間がやるべきなのか考える必要があると思いました。

資料6 生徒Aの第2時の振り返り

第3時では、生徒Aの振り返りを取り上げ、情報技術が発展することの課題について考える時間とした。生徒同士で考えを共有し、その後、教師自作の資料を配付し、考える時間を設けた。

生徒Aは前時と同じようにAIに注目し、考えをまとめた。「AIによるデメリットには情報漏洩のリスク、法整備や責任の所在が明らかになっていない、今、人がやっている仕事がAIに代わってしまう」とまとめることができた。また、生徒同士の意見を交流する時間では、スマホに注目した生徒と交流し、それぞれのメリット・デメリットについて意見を交流することができた。

生徒Aは振り返りに「前の授業でも考えたけど、AIによって社会がよくなることもあるのかもしれないけれど、デメリットもあるので、気を付けて使わないといけないと思いました」「スマホについて調べている子と意見交換をしたけど、同じようにメリット・デメリットがあったから情報技術が発展することは良い面だけではないのかと思いました」と記述している。

AIの発展によるよくない点について調べました。情報漏洩してしまったり、まだ始まったばかりの技術だと法整備ができていなかったり、課題はたくさんあるということが分かりました。前の授業でも考えたけど、AIによって社会がよくなることもあるのかもしれないけれど、デメリットもあるので、気を付けて使わないといけないと思いました。スマホについて調べている子と意見交換をしたけど、同じようにメリット・デメリットがあったから情報技術が発展することはよい面だけではないのかと思いました。

資料7 生徒Aの第3時の振り返り

第2時、3時で情報技術に関する資料を適切なタイミングで提示したことで、生徒Aが情報技術の発展によるメリット・デメリットについて問題意識をもって考えた。また、生徒同士の交流の時間を確保したことで、AIだけでなく、スマホなど情報技術の発展の社会に対する影響について考えることができた

以上より、手だて(1)―②は生徒が問題意識をもち続けて学習に取り組むことへの手だてとして有効であったことが分かる。

(3) 情報を共有しながら、課題の解決に向けて社会に働きかけようとする生徒A(手だて(2)―①)

第4時ではこれまで調べたことをクラス全体で共有した。AI、スマホ、ドローン、それぞれのメリット・デメリットを共有した後に共通点について話し合った。生徒はそれぞれ調べた内容について、発言した。ある程度意見が出てきたところで、教師から「それぞれに共通していることはありますか」と発問し、生徒の考え

を深める場面を設定した。そうすることで、生徒C4が「それぞれ人間の生活が楽になる」と発言した。生徒Aはこれらの発言を受けて「人間の生活が楽になるパターンもあるし、楽にならないパターンもある。両方ある。デメリットの中に戦争とかもあったから、これ以上発展しない方がよいのかもしれない」と発言した。AIの発展に注目していた生徒Aが他の情報技術の発展に関するメリット・デメリットに触れることで、情報技術の発展全体に関する課題に気付くことができたと分かる。情報技術のメリット・デメリットに注目したことで、C7「これからの社会でどうやって情報技術を利用していかかがとても大切だ」という発言につながり、新たに課題を見つけていることが分かる。

生徒Aは振り返りに「AIだけでなく、発展している情報技術全般に共通してメリット・デメリットがあると分かりました。C7さんが言っていたように情報社会は進化し続けるので、これからどうするのか考える必要がある」と書き、生徒がそれぞれ調べた内容を共有したことで、生徒Aの考えがAIのメリット・デメリットから情報技術の発展のメリット・デメリットに深まっていることが分かる。また、情報社会が発展する社会に求められることとして、「どんどん進化していく技術においていかれると、社会に取り残されてしまうので、そういったことがないように新しい技術に興味を持ち続けて、誤った使い方をしないことがこれから大切」と書き、問題の解決に向けて考え始めていることが分かる。

第5時は「情報技術が発展し続ける社会で求められていることは何か考えよう」という課題で話し合った。話し合いの前半では、求められる力について、対応力、想像力、知識、考えて利用するなど、それぞれが考えた力について話し合いをした。多くの生徒は、こういった力があれば、情報技術が発展した社会でもよい方向へ向かっていくという結論になった。

話し合いの途中で教師から「この資料を見ると、想像力もあるし、考えてAIを活用していると思うのだけれど、よくない社会に向かっている。よい社会に向かっていくために必要なことはなんなんだろう」と発問し、資料を配付した（資料8）。

教師からの発問を受け、生徒Aは「やっていいこととやっていけないことを判断する力が必要になる」と前時の振り返りの中で対応力が必要と考えていた生徒Aが判断する力が必要と発言し、教師が配付した資料や発問によって、新たに必要な力について考えることができた。また、法律について言及した生徒の発言から生徒Aは「逮捕されていないということは、犯罪ではないから、だからこそ、判断力が必要になってくると思う」と発言し、話し合いによって仲間と意見を交流したことで、自分の考えの根拠がより明確になり深まっていることが分かる。また、話し合いの最後で生徒Aが「自分だけでなくみんなができないとだめ」と発言したことに対して「みんなとは？」と問い返したことで、「家族とか社会とか」と発言し、社会に向けて考え始めることができた。

チャット GPT でマクドナルドに“クレーム”連発→無料券で1年間
タダ飯 英男性行動が物議



英国で、チャット GPT を利用して約1年間、大手ハンバーガーショップ、マクドナルドで無料の食事をした男性が話題となった。
米国の科学専門誌「ネイチャー」が発表した11日「英国のある男性がチャット GPT を活用して、顧客満足度アンケートを作成し、無料食事を得た」と報じた。
報道によると、この男性は、マクドナルドのレポートを見てアイデアを思いついたという。現地のマクドナルドのレポートには顧客満足度アンケートにつながる固有コードが印刷されており、手紙を送る顧客の1部は、無料食事をサービスされるシステムがあった。男性が SNS 上で行った手紙の“狂言”によると、チャット GPT に、「マクドナルドに関する不満事項を入力した後、詳細で大きなレビューを作成するように要請。お店側に減価を促すよう。1万2000 字程度の文書を作成した。」
これに対しチャット GPT は、マクドナルドが無料食事を提供として提供しない水準となる不満事項を回答として出した。さらに男性は、説得力のあるレビューにするため、チャット GPT が作成した内容の一部を自身で直接修正して完成度を高めた。その結果、無料食事をもらったという。男性は、このレビューを他の複数の店舗でも使用。顧客が捨てたレポートを拾って利用し、同様のレビューを送って、その度に食事をもらったという。この行為で、1年近くの間、ほぼ毎日、無料の食事を得た。しかし、現地のマクドナルドがこれに気づき、無料食事を提供するための男性の報酬にビュースタッフも関わったとした。
「ネイチャー」が発表した記事は「チャット GPT の潜在能力はユーザーの創意する力にかかっている。マクドナルドを無料で利用できるようにしてくれるとは誰も予想できなかったが、ある顧客がその仕事をやり遂げた。AI を創造的に活用した事例」と評価しつつも「ただいっしょに使用法を防止するためには、倫理的指針と監督が必要」と指摘した。

資料8 第5時配付資料

新しい技術に対しての対応力が大切だと思っていたけれど、それだけではなく、思いやりなどの人間性が大切だと思いました。また、そういったこと考えが社会全体に広がることがこれからの社会に必要なだと思いました。まず、今日勉強したことを家族に話そうと思いました。

資料9 生徒Aの第5時の振り返り

生徒Aは振り返りに「それだけでなく、思いやりなどの人間性が大切」という記述した。話し合いをして仲間同士が関わり合う場を設定したことで、新しく自分の考えを築くことができたと分かる。また、「社会全体に広がるが必要」「家族に話そうと思いました」と記述しており、教師が問い返しを行ったことで、自分がどうするかだけでなく、課題の解決に対して社会にどう働きかけていくか考えることができたと分かる。

以上より、手だて（2）—①は生徒が社会に参画しようとすることにに対して有効であった。

（４）課題の解決に向けてできることを考え、実行する生徒Ａ

第５時で自分自身だけでなく、関わる社会も変わる必要と考えた生徒はどうやって広げていくのか考える時間を設定した。生徒Ａは「どこまで広げる必要があるのか考える必要がある。家で話したら興味をもっていない反応だった。まずは地域に広めることが大事だと思う」と発言した。生徒Ａの発言を基に地域に向けて回覧板を作成することとした。生徒Ａは回覧板のまとめの中で、「授業で考えた、これから求められていく力を回覧板を通し、地域の方に知ってもらいたいと思い作らせていただきました」と記述した。情報技術の発展によるメリット・デメリットをまとめており、学習したことを基にしてまとめていることも分かる。回覧板を作成して地域に対して働きかける場を設定したことで、生徒Ａが地域に働きかけたいという思いをもち、学習したことを基にまとめていることが分かる。

正しくない使い方をすれば人が暮らしにくい世の中になってしまうことが分かりました。また、人間性を高める必要があると思いました。回覧板で地域の人に伝えることができたが、もっとできることがあるのではないかと思ったし、変化していく社会で自分で考えて判断していきたい。そうすると発展した技術の本当の価値が出てくると思う。

資料１０ 生徒Ａの単元の振り返り

単元のまとめの振り返りで生徒Ａは「もっとできることがあるのではないか」「変化していく社会で自分で考えて判断していきたい」と記述しており、単元を通して生徒Ａが社会的事象を自分事と捉えて課題を考えていることが分かる。

以上より、手だて（２）—②は生徒がよりよい社会に参画しようと動き出すことに対して有効であった。

７ 研究の成果

（１）仮説１について

【仮説１】取り扱う社会的事象との出会わせ方を工夫したり、実際に情報技術を使う場面を設定したり、教師自作の資料を活用したりすることで、社会的事象に問題意識をもって学習を進めることができるだろう。

単元の導入の段階でＡＩを実際に扱う場面を設定したことで、生徒Ａは「自己紹介が一瞬でできちゃう。面倒くさいことが一瞬でできる」と発言し、情報技術の発展に対して興味を示していた。また、中日新聞「面接×ＡＩ」の記事を提示したことで、第１時の振り返りの中で「自分がどうするか、どうやって情報技術を使うか」と振り返っており、社会的事象に対して問題意識をもたせることができた。

教師自作の資料を提示したことで生徒ＡはＡＩに興味をもち学習を進めた。第２時、３時では情報技術のメリット・デメリットに関する資料を提示し、生徒自身の考えを深める時間となった。教師が適切な場面で資料を提示したことで、情報技術の発展のメリットだけでなく、デメリットも考えることができ、問題意識をもって学習に取り組ませることができた。

以上のことより、仮説１に対する手だては「社会的事象に問題意識をもって学習を進める」ことに対して有効であった。

【仮説２】生徒の思考を整理したり、考えを深めたりする場面で仲間と関わる場面を設定したり、考えたことを広げる場面を設定したりすることで、より良い社会への参画を目指して動き出すことができるだろう。

生徒が共有する場を設定したことで、生徒がそれぞれ調べた中から共通点を見つけ出すことができ、メリット・デメリットだけでなく、「情報技術が発展した社会」の課題を考えさせることができた。

まとめる段階で地域に向けて回覧板を作成する場を設けたことで、生徒Ａは実際に社会に対して働きかける場を経験し、「もっとできることがあるのではないか」と振り返えりを書き、さらに社会に参画しようとする気持ちをもたせることができた。

以上のことより、仮説２に対する手だては「よりよい社会への参画を目指して動き出す」ことに対して有効であった。

８ 今後の課題

本実践では、生徒が考えたことを言葉や文章に表現できない場面があった。板書や思考ツールの活用により視覚化し、多面的・多角的に考察したことを実感できるようにしたい。